

紹介

桜井万里子・橋場弦編

『古代オリンピック』

現代の日本において、古代ギリシア史という学問領域が社会からの直接的なニーズに応じて研究されるということは、多くはない。そのような中、四年に一度のオリンピックは人々が古代ギリシアに関心を抱く絶好の機会といえよう。このような機会に、関連した書物が出版されることは珍しいことではない。例えば、東京オリンピックの開催に際しては、日本における古代ギリシア史の泰斗である村川堅太郎氏によって、古代オリンピックに関する啓蒙書が書かれている（『オリンピック——遺跡・祭典・競技』中央公論社、一九六三年）。そして本書も、まさに「二〇〇四年夏のアテネ・オリンピックに合わせて」出版された。

本書はプロローグ、エピソードと四章から構成されている。また各章は、二または三節から成っており、それらが「東京大学文学部西洋史研究室で学んだ同門」である

一〇名の研究者によって分担され執筆されている。以下、本書の構成に即して概要を紹介しよう。

古代ギリシア史とオリンピックについて概説するプロローグに続き、第一章「オリンピックの誕生」では、オリンピック発掘史、各遺跡の紹介がなされ、オリンピックの起源について触れられている。

第二章および第三章は、古代オリンピックがいかにして催されていたのかを描き出している。具体的に述べるならば、第二章「祭典と競技」においては、オリンピックにともなう休戦（エケイリア）、オリンピックに参加した競技者・審判・観客についての説明がなされている。第三章「勝利と栄光」では、古代オリンピックにおいて争われた各競技の紹介がなされ、優勝賞品が用意される競技会が存在していた中で、オリイプの冠のみが賞品であり続けたオリンピックにおける優勝が、勝者にとつてはいかなる意味を持っていたのかについて考察されている。

第四章「変わりゆくオリンピック」では、古代オリンピックの盛期とされている古典期を経た後、ヘレニズムとローマ時代にお

けるオリンピックについての分析が行なわれている。そして以上の章を踏まえ、「古代から現代へ」と題されたエピソードにおいては、クーベルタンに始まる近代オリンピックの中に、古代オリンピックがいかに継承されていたのかを問う。

では、従来の同様の書と比較した場合、本書の特徴としていかなる点を指摘できるだろうか。まず一点目としては、ヘレニズム時代以降のオリンピックについての新たな歴史像を描き出している点を挙げられよう。例えば、前述の書『オリンピック』の中で村川氏は、「施設の完備と精神の喪失」と題した一章を設け、ヘレニズム時代以降のオリンピックには「その生命であった、ヘレネスの民族的祭典、ポリスを代表するアマチュアの仕合いという特徴が、二つながらに失われた」と述べている。このようなヘレニズムとローマ時代をオリンピックの衰退期とみるネガティブな見解に対し、本書ではヘレニズム時代をオリンピックがヘレニズム世界に拡散していった時代、新たな生命力を吹き込まれた時代として積極的な再評価を試みている。また、村川氏は三世紀半ばの碑文史料をもつて、これを現

在に伝わる主要な競技優勝者に関する最後の情報であるとし、それ以降はオリンピック斜陽の時代であったとの対し、本書では四世紀の優勝者について記されている新史料（一九九四年出土）を取り上げ、最末期においてすらオリンピックは往年の国際性、ゼウス神崇拜の側面を失ってはいなかったとしている。

そして第二点としては、このようなヘレニズム時代以降のオリンピックをネガティブに捉える視点の背景を、近代オリンピックとの関係性の中から探っているという点が挙げられよう。すなわち、近代オリンピックは、フェアプレーとアマチュアリズムの精神という二本柱の模範を古代オリンピックに求めた。そのため、選手のプロ化が進行し、競技をめぐるのは賄賂も交わされていたヘレニズム時代以降のオリンピックを排除し、古典期のオリンピックのみを理想化して受け入れた。しかし実際には、古典期の選手であっても、優勝者には賞品以外のかたちでの富と権力が集中していたという点ではプロの選手であったし、富と権力ゆえの取引も行なわれていた。これらのことから「古代オリンピックの精神」なる

ものは、「近代の創造」に過ぎないと指摘しているのである。

以上のように本書は、古代オリンピックについての単なる啓蒙的な知識を提供するにとどまらず、近代オリンピックに対する問いかけも行なうことによって、近代スポーツを観る際の新たな視点も示唆している。それと同時に、古代ギリシアに理想を求めてきた近代における古代ギリシア史研究を省みる機会も提供してくれるといえよう。

（新書版 二二二頁 二〇〇四年七月

岩波書店 七四〇円＋税）

（阿部拓児 京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

荒松雄著

『中世インドのイスラム遺蹟』

—— 探査の記録 ——

近年、中世インドのイスラム（ムスリム）諸王権の建造物に関する研究が盛んになってきている。中世インド史の碩学、荒松雄氏の手になる本書もそのような流れを大きく推進するものである。

氏は、これまでにデリー・サルタナットやムガル帝国期のデリーについて多くの研究を公にしてきたが、本書の特徴は、主にデリー以外の諸地域の中世イスラム建築物を対象として、その特徴と歴史的意義を考察している点にある。そして特筆すべきは、従来の内外の研究書に比較して、後掲の表に見られるように極めて多くの遺蹟写真を取載していることである（各遺蹟につき平均二枚以上）。また、各写真に英文タイトルを付け、巻末に参考文献一覧と用語解説を付録するなど海外の研究者や入門者にとっても有用な書となっている。本書の元になった遺蹟調査は、著者が中心になって行なった一九五九―六〇年の東京大学インド史蹟調査団のそれであり、一部は一九七一年に実施された調査である。対象遺蹟は、城砦、モスク、墓廟、スーフィー（イスラム神秘主義者）聖廟、水利施設（貯水池、井戸等）等であり、今日すでに消滅し、本書にのみ残る遺蹟も少なくないと思われる。本書は、表に見られるように、遺蹟調査地別に五つの章に分けられ、各章は、一、各地域の初期ムスリム諸王朝の略史、二、遺蹟探査紀行、三、各遺蹟の特徴の順に記